

のパフォーマンスがあるのかというのがヘルスマトリックス。どれぐらいの素晴らしいかに対してパフォーマンスをつけた。日本は大学病院ですらガイドラインに合わせているが、全く逆なことをやっていると思う。アメリカに行つた時、みんながなぜ日本の大学はガイドラインに合わせているのかとびっくりされ、アメリカにはそんなことをしていたらつぶれると言われる。

標準化も大事だが、標準化の目的が、先進国の中で日本だけ全く違うのではないか。この10年間で医療ITが進み、クリニカルエクセレンスを測るツールとしては、この3年間で日本のレベルは、世界で30番目ぐらいになってしまった。クオリティインジケータという概念が日本の医療の中に植え付けられなかつたからであつて、医療機関や厚労省の責任ではなく、日本の文化の問題ではないか。医療の品質に差があるということを日本国民が受け入れない限り、多分ITは根付かないのではないか。むしろ連携するだけなら紙だけでいいのではないかというのが今の私の本音。医療費には限りがあるので、そろそろ本音ベースで…。そうでないとEHRは根付かないと思う。それを打ち破ろうとしているのが今度の文科省のヘルスマトリックスのプロジェクト。もし採択されたら、先ほど長谷川さんがおっしゃったようなことが日本もできるようなものをつくろうと思っている。

田中： 次回は、来月医療情報学会でやります。

(終了)

厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発研究事業）  
分担研究年度終了報告書

日本版EHRを目指した地域連携電子化クリティカルパスにおける共通形式と疾患別項目の標準化に向けた研究

研究分担者 木村 通男（浜松医科大学医学部附属病院医療情報部 教授）

研究要旨

施設間診療情報連携が現実のものになるにつれ、単に電子カルテを見せ合う連携は、医師に過重な負担を与えててしまうという指摘が出てきた。この状態、つまり情報の洪水から医師を救うには、各種臨床サマリ文書の連携に留めることが重要である。

今回、世界的に使われつつある HL7 CDA R2 をベースにした CCD(Continuity Care Document)に、糖尿病協会の糖尿病連携手帳の項目を対応付けることができた。

患者基本情報、検査結果などは定められたデータ形式で格納するため、その後のデータベースへの取り込みと検索が、コードさえ標準化されれば可能であるが、処方はこの手帳では自由文なので、今後の課題となる。

今後これらが他の分野に広まるには、まずその分野の連携内容の合意が大事で、次いでその項目が、コードの標準化だけでなく、記述のデータ形式の標準化も必要である。

A. 研究目的

施設間診療情報連携が現実のものになるにつれ、単に電子カルテを見せ合う連携は、医師に過重な負担を与えててしまうという指摘が出てきた。この状態、つまり情報の洪水から医師を救うには、各種臨床サマリ文書の連携に留めることが重要である。

本邦では平成22年3月に厚生労働省が標準的規格を定めた際に、電子紹介状規格として HL7 CDA R2 がそのリストに含まれた。また、国際的にはさらにこの CDA を臨床文書に特化させた、CCD(Continuity of Care Document)が使われだしている。

今回、糖尿病連携手帳の項目を例として、

その内容を CCD と対応付け、CCD 形式での連携が実現可能であることを示す。

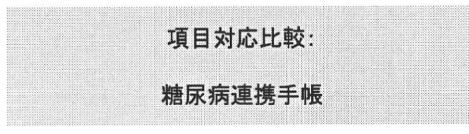
B. 研究方法

(社)日本糖尿病協会、糖尿病連携手帳には数多くの項目が扱われている。一部はもちろん患者の基本情報であり、来院時ごとに記載する項目も多い。また、病診の連携が一番頻繁に行われているのもこの糖尿病患者である。

今回、この手帳の項目を CDA R2 Level2 に対応させることを試みた。

## C. 研究結果

図に項目の対応表などを含む資料を示す。



参考資料:(社)日本糖尿病協会、糖尿病連携手帳

HL7 CCD example: 手帳基本情報				
手帳データ項目	データ型	Section	Section/Entry	備考
記載日	TS	Header		
施設	ON	Header		
記載者	PN	Header		
氏名	PN	Header		
性別	CV	Header		
生年月日	TS	Header		
住所	AD	Header		
目的	ST	Purpose		
身体所見	Vital Signs		Physical Examination	
身長	PQ		Observation	
体重	PQ		Observation	
脂肪体重量	PQ		Observation	
BMI	PQ		Observation	
社会歴	Social History		Functional Status	
過去最大体重	PQ		Observation	
20才時の体重	PQ		Observation	

3

HL7 CCD example: 手帳基本情報				
手帳データ項目	データ型	Section	Section/Entry	備考
既往歴	CE	Problems		
虚血性心疾患			Observation	
肝疾患			Observation	
慢性炎症			Observation	
脳血管疾患			Observation	
肥満			Observation	
その他			Observation	
家族歴	CE	Family history		
糖尿病			Observation	
高血圧			Observation	
虚血性心疾患			Observation	
肝疾患			Observation	
慢性炎症			Observation	
脳血管疾患			Observation	
肥満			Observation	
その他			Observation	
就寝入院		Hospital Course		
就寝入院した日	TS		Observation	
食事量	ST		Observation	
蛋白制限	ST		Observation	
塩分制限	ST		Observation	

2011/5/12

総合糖尿病研究会

5

HL7 CCD example: 手帳検査情報				
手帳データ項目	データ型	Section	Section/Entry	
検査結果		Results		
食事量	PQ		Observation	
検査日	TS			
施設	ON			
身体所見	Vital Signs		Physical Exam	
体重	PQ		Observation	
血圧	IVL_PQ		Observation	
血熱線			Observation	
空腹時	PQ			
食後	PQ		Observation	
HbA1c(UDS値)	PQ	Results	Observation	
HbA1c(国際標準値)	PQ		Observation	
總コレステロール	PQ		Observation	
LDLコレステロール	PQ		Observation	
HDLコレステロール	PQ		Observation	
中性脂肪	PQ		Observation	
AST	PQ		Observation	
ALT	PQ		Observation	
T-GTP	PQ		Observation	
クリアチニン	PQ		Observation	
eGFR	PQ		Observation	
尿アルブミン	PQ		Observation	
蛋白尿	PQ		Observation	
治療内容・療養指導のポイント	ST	Procedures		

2011/5/12

総合糖尿病研究会

6

HL7 CCD example: 手帳基本情報				
手帳データ項目	データ型	Section	Section/Entry	備考
診断	CE	Active Problems		
1型糖尿病			Observation	
2型糖尿病			Observation	
妊娠糖尿病			Observation	
その他			Observation	
絶口ブドウ糖負荷試験	Results			
年齢	TS		Observation	
血清値	PQ		0.30,60,120	
インスリン	PQ		0.30,60,120	
合併症	CE	Problems		
網膜症			Observation	
神経障害			Observation	
動脈硬化			Observation	
腎症			Observation	
歯周病			Observation	

3

2011/5/12

総合糖尿病研究会

4

HL7 CCD example: 手帳検査情報				
手帳データ項目	データ型	Section	Section/Entry	Entry
系統的観察		Review of System		
検査日	TS			
施設	ON			
神経障害	CE	Results		
腎症	CE		Observation	
頭部CT・MRI	CE		Observation	
筋筋肉エコー	CE		Observation	
溶芽			Observation	
肥厚			Observation	
ブラーク			Observation	
baPWV/ABI	CE		Observation	
心電図・エコー(安静・食)	CE		Observation	
足エコー	CE		Observation	
胸部レントゲン	CE		Observation	
臍周エコー	CE		Observation	
便潜血	CE		Observation	
胃カメラ・造影	CE		Observation	
尿	PQ		Observation	
治療内容・療養指導のポイント	ST	Procedures		
来院指導	ST	Optionally found in Care Plan		

2011/5/12

総合糖尿病研究会

7

## HL7 CCD example: 手帳検査情報

手帳データ項目	データ型	Section	Section/Entry
確定検査		Results	
検査	TS		
拍診	ON		
肺膜	CE	Observation	
貧血浮腫	CE	Observation	
光反射	CE	Observation	
次回受診	ST	Care plan	
幽門病		Results	
検査日	TS		
既往歴	ON		
所見	TS	Observation	
次回受診	TS	Care plan	
治療内容・検査指導のポイント	TS	Procedures	
2011/5/12		改修版手帳登録	8

## 手帳検査情報サンプル

項目/日付	基準値	2005/10/10	2010/8/6
身長	cm	163.3 cm	162.7 cm
体重	kg	73.6 kg	69.8 kg
扁平	mm/Hg	132/84	145/88
脉搏	mmHg	mmHg	mmHg
握力(握り)	Kg	56.7 kg	58.2 kg
体温			
BMI	18.5-24.9	27.6	26.4
体脂肪率			
腰団	cm	90.0	
心拍数			

2011/5/12 改修版手帳登録

最後に、Vital sign と Results について、CCD で記載した XML を参考に付記する。

```
<entry typeCode="DRIV">
  <organizer classCode="CLUSTER" moodCode="EVN">
    <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.31"/>
    <!-- Vital sign component template -->
    <id root="c8f88320-07e0-11db-bd13-0800200c9a64"/>
    <code code="20051010130000+0500"/>
    <statusCode code="completed"/>
    <effectiveTime>
      <low value="20051010130000+0500"/>
      <high value="20051010140000+0500"/>
    </effectiveTime>
    <component>
      <observation classCode="OBS" moodCode="EVN">
        <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.31"/>
        <id root="c8f88321-77ad-11db-bd13-0800200c9a64"/>
        <code code="27113001" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.96" displayName="身長 Body height"/>
        <statusCode code="completed"/>
        <effectiveTime>
          <low value="20051010130000+0500"/>
          <value xsi:type="PQ" value="162.3" unit="cm"/>
        </effectiveTime>
        <component>
          <observation classCode="OBS" moodCode="EVN">
            <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.31"/>
            <id root="c8f88322-87ad-11db-bd13-0800200c9a64"/>
            <code code="80373000" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.96" displayName="体重 Body weight"/>
            <statusCode code="completed"/>
            <effectiveTime value="20051010130000"/>
            <value xsi:type="PQ" value="73.6" unit="kg"/>
            <interpretationCode code="H" codeSystem="2.16.840.1.113883.5.83"/>
          </observation>
        </component>
      </observation>
    </component>
  </organizer>
</entry>
```

Vital Sign

改修版手帳登録

10

```
<entry typeCode="DRIV">
  <organizer classCode="BATTERY" moodCode="EVN">
    <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.32"/>
    <!-- Blood specimen component template -->
    <id root="7df8a2b0-67e4-11db-bd13-0800200c9a64"/>
    <code code="43788009" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.96" displayName="検体瓶"/>
    <statusCode code="completed"/>
    <effectiveTime>
      <low value="20051010130000+0500"/>
      <high value="20051010140000+0500"/>
    </effectiveTime>
    <component>
      <specimen>
        <id root="1073448-eace-4f71-9948-43f478d42861"/>
        <code code="119297000" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.96" displayName="Blood specimen"/>
        <statusCode code="completed"/>
        <effectiveTime value="20051010130000"/>
        <value xsi:type="PQ" value="73.1" unit="mg/dl"/>
        <interpretationCode code="N" codeSystem="2.16.840.1.113883.5.83"/>
      </specimen>
    </component>
  </organizer>
</entry>
```

Results

改修版手帳登録

11

```
<entry typeCode="DRIV">
  <organizer classCode="BATTERY" moodCode="EVN">
    <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.32"/>
    <!-- Blood specimen component template -->
    <id root="1072620-37a5-11db-bd13-0800200c9a64"/>
    <code code="20109008" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.96" displayName="血液検査"/>
    <statusCode code="completed"/>
    <effectiveTime value="20051010130000"/>
    <value xsi:type="PQ" value="98" unit="mg/dl"/>
    <interpretationCode code="N" codeSystem="2.16.840.1.113883.5.83"/>
  </organizer>
  <observation classCode="OBS" moodCode="EVN">
    <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.31"/>
    <id root="1072620-37a5-11db-bd13-0800200c9a64"/>
    <code code="14771-9" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.1" displayName="白细胞计数"/>
    <statusCode code="completed"/>
    <effectiveTime value="20051010130000"/>
    <value xsi:type="PQ" value="98" unit="mg/dl"/>
    <interpretationCode code="N" codeSystem="2.16.840.1.113883.5.83"/>
  </observation>
  <component>
    <observation classCode="OBS" moodCode="EVN">
      <templated root="2.16.840.1.113883.10.20.1.31"/>
      <id root="1072620-37a5-11db-bd13-0800200c9a64"/>
      <code code="20109008" codeSystem="2.16.840.1.113883.6.96" displayName="血液検査"/>
      <statusCode code="completed"/>
      <effectiveTime value="20051010130000"/>
      <value xsi:type="PQ" value="98" unit="mg/dl"/>
      <interpretationCode code="N" codeSystem="2.16.840.1.113883.5.83"/>
    </observation>
  </component>
</entry>
```

Results

改修版手帳登録

12

## 手帳検査情報サンプル

項目/日付	基準値	2005/10/10	2010/12/10
空腹時血糖	70-109mg/dl	99	
空腹時尿糖	0-20mg/dl	11	
硝酸プロトクレアント試験(血糖値)	65-120mg/dl	81	
(10分)	0-160mg/dl	171	
(120分)	0-120mg/dl	130	
硝酸プロトクレアント試験(尿量)	0-20mg/dl	1	
(10分)	0-50mg/dl	4	
(120分)	0-50mg/dl	3	
HbA1c(%)	4.3-5.7%	5.5	
尿潜血(単価)	4.7-6.2%	5.9	
糞便		現症型	
角質			
硝コレステロール	130-210mg/dl	134	
中性脂肪	50-140mg/dl	151	
LDLコレステロール	70-139mg/dl	158	
HDLコレストロール	40-75mg/dl	47	

11

まず、患者基本情報は、Header にほとんど含まれた。また、既往歴、家族歴、合併症は、Problems, Family history, Hospital course に対応できた。検査結果、所見項目、Observation で書くことができる。一方、処方歴は Procedure として自由文での記載となつたため、データベースとして取り込むことが出来ない。

## D. 考察

これらで記述された内容を、データベースに取り込み、検索可能とするには、当然項目コード、および記述するデータ形式が標準化されていなければならない。今回の記述では、検査結果はそれぞれの項目とし

て定まったデータ形式で記述されているので、あとは項目コードが必要である。幸い、厚生労働省標準規格に JLAC（日本臨床検査医学会標準検査項目コード）も指定される予定である（前段階である HELICS 推奨規格となった）。まだ JLAC の普及は十分ではないが、今後は広まる可能性がある。一方で、処方は自由文なので、検索は今後も困難であろう。

海外の EHR 事例で、成功しているものは、電子カルテ全部連携ではなく、電子処方箋、検査の外注と結果送信、といった、部分的な連携が多い。サマリを対象とするケースもようやく CCD の普及により広がりつつある。今回、糖尿病手帳という、その分野で合意が取れている項目を対象として、それが CCD で実装できることを示したとともに、後でのデータ処理を考えた際の問題点が指摘された。

これを他の分野に適用するには、より簡単な対応付けツールが必要であろう。

## E. 結論

世界的に使われつつある HL7 CDA R2 をベースにした CCD(Continuity Care Document)に、糖尿病協会の糖尿病連携手帳の項目を対応付けることができた。

患者基本情報、検査結果などは定められたデータ形式で格納するため、その後のデータベースへの取り込みと検索が、コードさえ標準化されれば可能であるが、処方はこの手帳では自由文なので、今後の課題となる。

今後これらが他の分野に広まるには、まずその分野の連携内容の合意が大事で、次いでその項目が、コードの標準化だけでなく、記述のデータ形式の標準化も必要である。

## F. 研究発表

### 1. 論文発表

- 1). M Kimura, P Croll, BL Li, CP Wong, SB Gogia, A Faud, YS Kwak, S Chu, A Marcelo, YH Chow, W Paoin, YC Li. "Survey on Medical Records and EHR in Asia-Pacific Region - Languages, Purposes, ID's and Regulations, Methods of Information in Medicine", 50(2) in press, 2011.

### 2. 学会発表

- 1). 中安一幸, 木村通男, 山本隆一, 斎藤稔.“産官学連携規格 2010 – EHR の必要性、必然性 –”, 第 30 回医療情報学連合大会論文集, pp.73-76, 2010.

## G. 知的所有権の取得状況

特になし

厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)  
〔総括・分担〕研究報告書

「日本版 EHR を目指した地域連携電子化クリティカルパスにおける  
共通形式と疾患別項目の標準化に向けた研究」  
疾患別連携パス分科会・総括

- 分担研究者 1. 宮本正喜 兵庫医科大学 医療情報学 教授  
2. 原 量宏 香川大学瀬戸内圏研究センター 特任教授  
徳島文理大学理工学部臨床工学科 教授  
3. 水野正明 名古屋大学大学院医学系研究科 準教授  
吉田 純 医療法人医仁会 さくら総合病院・特別顧問  
4. 武藤正樹 国際医療福祉大学大学院 教授  
5. 岡本悦司 国立保健医療科学院 経営科学部経営管理室  
6. 秋山昌範 東京大学政策ビジョン研究センター 教授  
7. 長谷川英重 健医療福祉情報システム工業会 特別委員  
山肩大祐 香川大学医学部附属病院医療情報部 特命助教  
辰巳治之 札幌医科大学大学院医学研究科生体情報形態学 教授  
8. 平井愛山 千葉県立東金病院・内科・代謝内分泌学 院長

研究要旨

わが国は、2007年、世界で最初に全人口の21%以上が65歳以上の高齢者で占められる超高齢社会を迎えた。また、2011年3月11日に発生した未曾有の大震災、東北地方太平洋沖地震は東日本に壊滅的被害をもたらし、わが国の国力がますます低下するのではないかと懸念されている。このような状況に押しつぶされることなく、今後も世界一の健康長寿立国を維持するためには、すべての国民が地域を問わず、質の高い医療、介護、健康関連サービスを受けられる社会の実現が必要である。このような状況において地域連携パスは大きな役割を担っている。地域連携パスは2大脛骨頸部骨折や脳卒中から癌に対するパスも追加され、糖尿病パスや循環器のパス(TCI等)のパスと様々な疾患に広がりつつある。これに伴って地域連携パスシステムが開発されつつある。日本版EHRを目指した地域連携パスシステムにおける共通形式と疾患別項目の標準化を達成するため、システムの標準化、安全管理、情報コンテンツの標準化等に焦点をあて、それぞれの分担研究者の事象実験や試みを推進し、地域連携パスシステムが開発の知見が得られたので報告する。

A. 研究目的

1. 脳卒中地域連携パスシステムにおける  
IPsecVPN+IKE の運用

医療連携において、その地域の医療連携の仕組みと有用性を急性期病院入院時に患者に理解してもらうことが必要である。そのためにも目に見える形の地域連携パスシステムを構築することが重要である。

2010年より神戸市医師会は医療連携システムとして、地域連携パスシステムの開発を行っており、デジタル的にパス情報を送受信できるシステムを開発した。デジタル的にデータを送るためにPsecVPNとIKEによるセキ

ュアなネットワーク管理が推奨されている。今回、IPsecVPNとIKEの実運用での問題点を明らかにし、問題点を吸収する工夫やインターフェースの改善に役立てることを目的とした。

2. 検査データ・検診データの連携

日本版EHRを目指した地域連携電子化クリティカルパスの運用体制構築のためには、継続した検査データや健診データを継続して収集できる仕組みが必須である。しかし、地域医療連携クリティカルパス導入に対する問題点として、通常業務に加えて地域連携クリテ

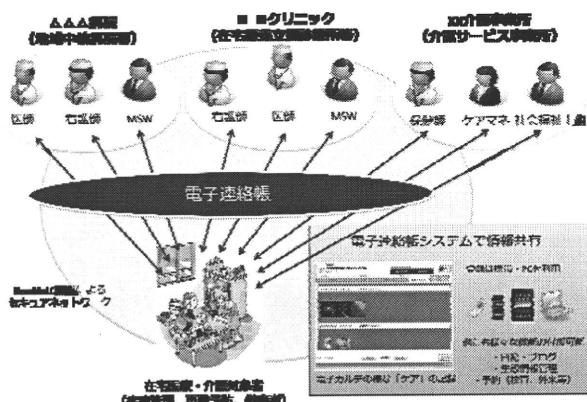
カルパスを作成する労力の問題が挙げられる。本研究では診療所等が検査会社に外注している検査結果情報と、学校検診による検査データに着目し、これらの情報を情報連携するためのモデルや問題点の検討を行うことを目的とした。

### 3. 脳卒中・心筋梗塞を対象にした在宅医療用電子連絡帳の情報共有のあり方に関する研究

わが国をはじめ先進諸国ほとんどにおいて医療費の増大は深刻な問題となっている。その医療費の7～8割が、脳卒中（後遺症）、心筋梗塞（後遺症）、糖尿病、腎機能障害等の「慢性疾患」であり、それらの慢性疾患に罹患している患者の多くが高齢者である。

このような流れの中で、我々は脳卒中、心筋梗塞を対象に電子地域連携クリティカルパスを作成し、運用するとともに、パス内で扱われる医療・介護・健康情報の標準化と共有化を進めてきた。

本事業では、現在愛知県豊明市で運用されている「いきいき笑顔ネットワーク」を1つの事例に取り上げ、このネットワークで活用されている医療・介護・健康情報の標準化の仕組みを確立し、脳卒中・心筋梗塞を対象にした在宅医療用電子連絡帳のあり方について検証することを目的とした。



### 4. がん連携クリティカルパス

東京都港区において、がん連携パスの標準様式の作成と、そのIT化およびその運用評価を行うことを目的とする。

### 5. 東京都医療機関の分析

疾患別クリティカルパスによる地域医療連

携を促進するため、診療報酬上でも様々な方策がとられている。

東京都の医療機関の実態と現在の疾患別連携パス関連点数、がん治療連携について点数等を調査分析する事を目的とした。

### 6. 地域連携の医療情報基盤構築のため先進的事例

本研究においては、地域連携のための医療情報基盤構築のために、有効と考えられる先進的事例を検討することを目的とする。特に、米国・欧州における医療IT事情並びにクラウドコンピューティングの医療への応用に関して検討する。これらの情報技術は、情報の真正性を担保しつつ、携帯性・利便性を格段に高めるものであり、特に連携システムの構築に力を発揮すると考えられる。米国・日本の事例を検討し、応用可能性を検証する。

### 7. 海外の動向

EHRの実現に向けて、欧米諸国をはじめとして各国々に取り組みが進んでいる。医療制度や社会制度が各国で異なることから、一概に取り入れることはできないが、日本における課題を踏まえつつ、各国の状況を参考とし、ベストプラクティスとして参照することは今後の日本版（日本における）EHRの実現を考える上で有用なことである。本研究では、新たにグローバルなEHRの連携の取り組みを俯瞰し特に地域医療基盤についてその実施状況、課題等を把握することを目的とする。

### B. 研究方法

#### 1. 脳卒中地域連携パスシステムにおけるIPsecVPN+IKEの運用

##### 1.1 調査対象

###### 1) ダミー患者

- ①武庫川一郎
- ②甲山太郎

###### 2) 連携病院

- ①兵庫医科大学病院－神戸市医師会リハビリセンター楨村医院
- ②兵庫医科大学病院－神戸市医師会リハビリセンター海岸診療所

##### 1.2 実験方法

急性期病院；兵庫医科大学病院  
回復期施設：神戸市医師会リハセンター  
維持期病院；横村医院、海岸診療所

神戸市医師会で開発された地域連携パスシステムを使用し、ダミー患者情報の通信を行い、ソフトタイプ IPsecVPN+IKE の接続ならびに送信時、受信時のログをとり、通信状況を分析した。また、運用における問題点についても検討した。

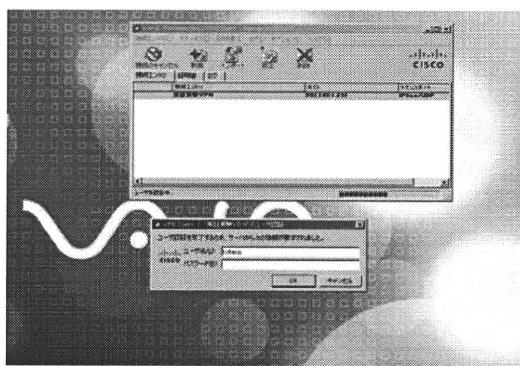


図 1. VPN 接続における ID, パスワード 入力画面

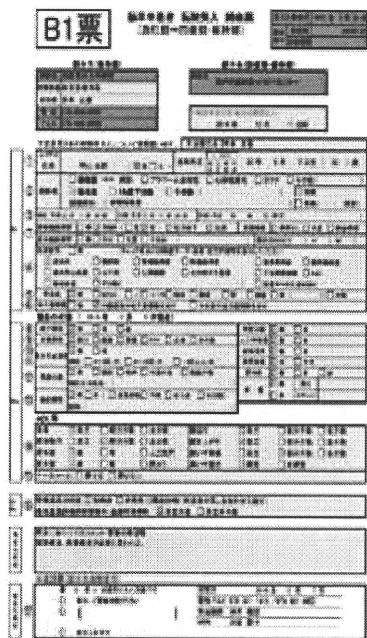


図 2. 急性期から回復期・維持期へのシート  
画面

#### (倫理面への配慮)

本研究においてダミー患者の情報を使い実証実験を行ったもので、実際の個人情報の運用は行っていないため、倫理面での問題はないと考えられる。

## 2. 検査データ・検診データの連携

### 1) 検査データ

検査会社と地域連携クリティカルパスシステム間の検査データ交換形式の検討及び試験を行った

### 2) 健診データの連携

定期的に収集されるデータとして健診データの重要性は高い。この点に着目し、大学の学生健診に用いられるデータについてデータ項目の精査を情報連携し、その可能性について検討を行った。

## 3. 脳卒中・心筋梗塞を対象にした在宅医療用電子連絡帳の情報共有のあり方に関する研究

### 1). 「いきいき笑顔ネットワーク」の電子連絡帳の画面フローの解析

愛知県豊明市で運用されている「いきいき笑顔ネットワーク」の画面フローを検討し、医療・介護・健康情報それぞれの流れを分析した。

### 2) 「いきいき笑顔ネットワーク」の電子連絡帳で扱う医療・介護・健康情報のデータベース構築

#### ①データベーステーブルの作成

「いきいき笑顔ネットワーク」の画面フローを検討し、情報コンテンツの流れを解析することで、必要なデータベーステーブルを作成した。

#### ②データベーステーブルの仕様

作成したデータベーステーブルの内容をさらに吟味し、詳細なテーブル仕様を定めた。

#### ③ネットワーク上での業務の検証

上記①②で仕様を決めたデータベーステーブルに従い、ネットワーク上でデータの連続的変換を検証した。

## 4. がん連携クリティカルパス

東京都港区内の 2 つのがん診療連携拠点病院

(国際医療福祉三田病院、東京都済生会中央病院)、6 診療所(鈴木胃腸消化器クリニック等)をメンバーとする「港区がん連携パス研究会」(代表幹事武藤正樹)とそのワーキンググループを形成し、以下の検討を行った。

### 1) 胃がん連携パスの運用検討

昨年度、港区がん連携パス研究会では、胃がんステージ I、II～III の港区版の連携パスと

運用マニュアル、患者用連携パスである「わたしのカルテ」を作成した。今年度はこの連携パスについて、平成22年診療報酬改定による「がん治療連携計画策定料(計画病院)」と「がん診療連携指導料(連携医療機関)」との整合性について検討を行った。

### 2) 港区がん連携パス研究会の開催

港区内の5つのがん診療連携拠点病院のがん連携パス担当者によりかけ、平成22年9月20日に国際医療福祉大学大学院(東京都港区青山)において研究会を開催した。以下の検討を行った。

- ①東京都の標準がん地域連携パスである5大がんの東京都医療連携手帳についての検討、
- ②港区内のがん診療連携の実態等について検討
- ③胃がんの連携パスのIT化とASP方式によるインターネットを通じたがん連携パスの情報共有の検討。

### 3) 診療所調査

作成した「港区版胃がん連携パス」について研究会に所属する6軒の診療所インタビュー調査を実施した。

#### (倫理面への配慮)

患者の個人情報保護に配慮して、患者名の匿名化、そのデータ保管について配慮。とくに連携パスのIT化における患者情報セキュリティについて配慮した。

## 5. 東京都医療機関の分析

### 東京都における

1) 疾患別クリティカルパス関連点数の届出状況を、関東信越地方厚生局が公開している保険医療機関の各種届出状況より、医療機関の名称、所在地、病床数を把握した。

### 2) 地域医療連携

地域連携診療計画管理料および退院時指導料(I, II)の届出の表示は区別されておらず一括して「地域連携」として表示されるのでその数を集計した。医療機関の種別は病院をさらに届出病床数200床以上を「大病院」それ未満を「病院」として区別し、届出病床が1~19床のものを有床診療所として統計を取った。以下の項目について分析した。

- ①医療機関種別の分析
- ②届出年別の分析
- ③市区町村別分布

### 2) がん治療連携

2010年改定で導入されたがん治療連携計画策定料およびがん治療連携指導料は、がん拠点病院を中心に策定された地域連携診療計画に沿ったがん治療に関わる医療機関の連携により、地域における切れ目のない医療の提供を促進するものである。次の項目について調査を行った。

- ①がん拠点病院およびがん治療連携計画策定料の状況
- ②がん治療連携指導料
- ③市区町村別分布

3) 脳卒中等とがんの医療連携普及率の相関  
脳卒中等を対象とする地域連携と、がん治療連携の届出医療機関割合に市町村ごとに相関はあるか? すなわち脳卒中で地域連携の進んだ市町村はがん治療でも同様の傾向があるかを調査した。

## 6. 地域連携の医療情報基盤構築のため先進的事例

研究方法として、文献およびインターネット上の調査ならびに実際のシステムのケーススタディから米国医療IT事情並びにクラウドコンピューティングの医療応用の有効性を検証した。(National Healthcare IT coordination, EU information center等のWebサイト、医療情報関連の最大のイベントの一つである、Health Information and Management System Society(HIMSS)の展示や発表等を参考にした。)

#### (倫理面への配慮)

本研究においてはあくまで先進的な医療情報・地域連携の枠組みと事例を検討することが主眼であり、実際に個人情報の運用は行っていないため、倫理面での問題はないと考えられる。

## 7. 海外の動向

EHRに向けた取り組みについて、米国、カナダ、英国、デンマーク、ニュージーランドを選定し、それらの国々について、過去3年間の文献や刊行物を調査し、政策の特徴、実現戦略等をまとめた。さらに昨年においては米国の民間会社によるPHRの取り組みにも注目をし情報を集めたので調査した結果のフォローも行った。本年は、新たにグローバルな

EHR の開発が進展する欧米における EHR 全体の位置付けの見直しを行う中で、研究開発、標準化、普及や今後の展望について、カンファレンス、標準化会議への参加や文献調査などをを行い、分析と整理を行った。

情報は以下のホームページ討を参照した  
<http://www.hhs.gov/healthit/healthnetwork>  
<http://www.ehealthinitiative.org/>  
<http://www.chcf.org/documents/chronicdis>  
<http://www.infoway-inforoute.ca/>  
<http://www.ehealthSmartBrief.com/>  
<http://www.healthdatamanagement.com/>  
<http://cfmediaview.com/>  
<http://www.iso.org>  
<http://www.openhealthtools.org>  
<http://www.who.int/healthmetrics/en/>  
<http://www.ihtsdo.org>  
<http://www.icmcc.org>  
<http://www.himss.org>  
<http://www.mapofmedicine.com>  
<http://www.e-p-a.org>  
<http://www.healthdatamanagement.com>  
<http://home.modernhealthcare.com>  
<http://medcitynews.com>  
<http://www.govhealthit.com>

### C. 結果

1. 脳卒中地域連携パスシステムにおける IPsecVPN+IKE の運用
  - 1) VPN+IKE (ソフトタイプ) の問題点
    - ・固定 IP が必要であり、ケーブルテレビ等のインターネット接続では DHCP サーバにて IP が付与されるので使用できないことが分かった。
    - ・接続に、インターネット接続、VPN+IKE 接続、システムの接続と 3 回もの認証が必要になり煩雑であり改善が求められる。
    - ・ネットワークの熟練者には十分使えるが、初心者には接続等が難しいことが分かった。
  - 2) ログによる接続状態 (一例の一部を示す)

表 1, ログによる接続状況一覧

武庫川 一郎 兵庫医科大学 病院			
No.	V P N接続	ア クセス I P	時 刻
1	VPN接続開始	219.162.134.167	13:53:26
2		219.162.134.167	13:54:06
3		219.162.134.167	13:54:26
4		219.162.134.167	13:54:46
5	VPN接続完了	219.162.134.167	13:55:06

### 2. 検査データ・検診データの連携

#### 1) 検査データ連携

地域医療連携クリティカルパスシステムは ASP 型のシステムであり、データセンターで情報を管理することにより、セキュアでかつ震災等にも強い管理体制が実現でき、このシステムを経由して連携する図 3 のようなモデルを構築した。

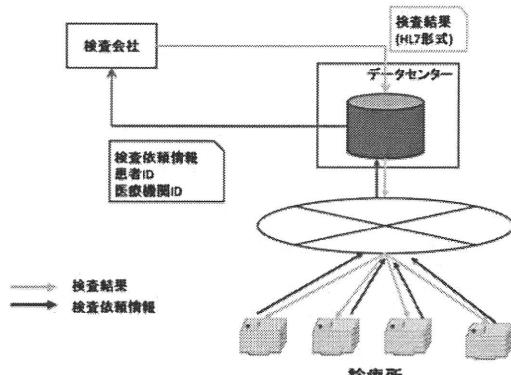


図 3. 検査情報連携モデル

診療所から検査会社へ依頼に関する処理には、検査依頼情報として患者 ID 及び医療機関 ID (検査会社が設定) を送信する。検査会社から診療所へ対する検査結果の送信処理については、検査データを HL7 形式でデータセンターに送る。これらの一連の流れにおいて、香川大学で現在開発中の糖尿病地域連携クリティカルパスシステムとローカルで情報取込試験を実施し、良好な送受信が行われた。

#### 2) 健診データ連携

データ連携において IT 利活用として、検査会社との連携は現場の業務負担の軽減に繋がり、これらを推進する上で重要であるのは、

データ交換形式に共通形式を利用することになった。これにより、異なる検査会社であっても同様に検査データをシステムに取り込むことが可能となり、データ連携がより推進される。また、検査会社に限らず、健診データに関する同様の処理を行うことにより、地域医療連携クリティカルパスの有用性は向上する。今回の学校健診データの検討では、実際にデータ連携の実証までは行っていないが、検討した PHR システムのデータも HL7 形式であるため、技術的には健診データとの情報連携は可能である。しかし運用面での問題も浮上している。それは学校健診は学校の管轄であるため、直接医療連携を行うことについての十分なる検討が必要とされる点である。これらの問題の解消も、今後の地域医療連携クリティカルパスシステム普及に対して大きな課題となった。

そこで、学校健診データの情報項目と香川県で行われている PHR 実証事業のシステムと情報連携との可能性について検討を行い、その結果、脈を除く全ての項目で取り扱い可能であることが明らかとなった。

表 2. 大学健診項目

健診項目		
身長	視力	検尿
体重	聴力	問診
胸部 X 線撮影	血圧	脈拍

### 3. 脳卒中・心筋梗塞を対象にした在宅医療用電子連絡帳の情報共有のあり方に関する研究

#### 1) 「いきいき笑顔ネットワーク」の電子連絡帳の画面フローの解析

「いきいき笑顔ネットワーク」の画面フローの分析結果を図 4 に示す。携帯電話、スマートフォン、タブレット PC や PC などマルチメディアで運用しているフローが確認できた。

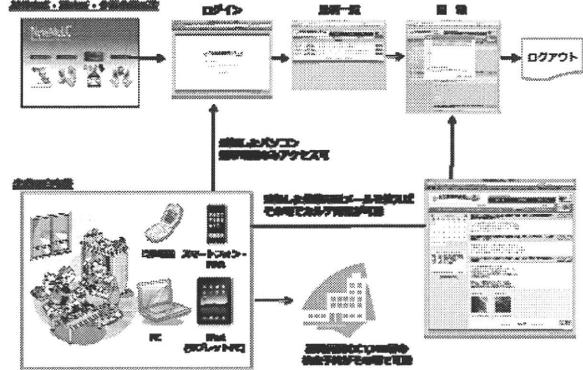


図 4 電子連絡帳システムの画面フロー

#### 2) 「いきいき笑顔ネットワーク」の電子連絡帳で扱う医療・介護・健康情報のデータベース構築

##### ①データベーステーブルの作成

「いきいき笑顔ネットワーク」の電子連絡帳で扱う医療・介護・健康情報の標準化を図るために、電子連絡帳サーバ上にあるデータベーステーブルを検証した。その結果、施設管理テーブル、役職管理テーブル、ユーザー管理テーブル、モニター管理テーブル、連絡帳トピックテーブル、管理情報 SQL 履歴テーブル、画面アクセス履歴テーブルの 8 つのテーブルで構成されていることがわかった。

##### ②データベーステーブルの仕様

###### a) 施設管理テーブル

施設管理テーブル仕様においては、施設 ID、施設名、電話番号、施設権限レベルの 4 つのシークエンスを作成し、それぞれに項目名称、項目 ID、型、データ型、制約等の項目を設け、コンテンツ内容を定義した。また、4 つのシークエンスのうち、施設 ID をプライマリーキーとすることで項目のひも付けを可能にした

###### b) 役職管理テーブル

役職管理テーブル仕様においては、役職 ID、役職表示順、役職名の 3 つのシークエンスを作成し、コンテンツ内容を定義した。3 つのシークエンスのうち、役職 ID をプライマリーキーとすることで項目のひも付けを可能にした。

###### c) ユーザー管理テーブル

ユーザー管理テーブル仕様においては、ユーザー ID、ユーザー名、ユーザーメールアドレス、ユーザーメールアドレス A、ユーザーメールアドレス B、ユーザー アカウント、ユ

ユーザーID、所属施設ID、ユーザー権限レベルの10のシークエンスを作成し、コンテンツ内容を定義した。10のシークエンスのうち、ユーザーIDをプライマリーキーとして項目のひも付けを可能にした。

#### d) 患者情報管理テーブル

患者情報管理テーブル仕様においては、患者ID、地域患者ID、フリガナ、性別、生年月日、郵便番号、住所、自宅電話番号、携帯電話番号、メールアドレス、勤務先、勤務先電話番号、登録ユーザーID、備考、名前、状態の16のシークエンスを作成し、コンテンツ内容を定義した。また、16のシークエンスのうち、患者IDをプライマリーキーとして項目のひも付けを可能にした。

#### e) 患者担当者管理テーブル

患者担当者管理テーブル仕様においては、担当者ID、患者ID、ユーザーIDの3つのシークエンスを作成し、それぞれに項目名称、コンテンツ内容を定義した。また、3つのシークエンスのうち、担当者IDをプライマリーキーとして項目のひも付けを可能にした。患者IDとユーザーIDではユニークな組み合わせを採用した。

#### f) 連絡帳トピック情報テーブル

連絡帳トピック情報テーブル仕様においては、連絡ID、患者ID、登録ユーザーID、メモ、登録日時、更新日時、削除フラグの7つのシークエンスを作成し、コンテンツ内容を定義した。また、7つのシークエンスのうち、連絡IDをプライマリーキーとして項目のひも付けを可能にした。患者IDとユーザーIDではユニークな組み合わせを採用した。

#### g) 管理情報SQL履歴テーブル

管理情報SQL履歴テーブル仕様においては、変更ログID、処理SQL文、処理時間、処理SQL実行ユーザーの4つのシークエンスを作成し、コンテンツ内容を定義した。また、4つのシークエンスのうち、変更ログIDをプライマリーキーとして項目のひも付けを可能にした。患者IDとユーザーIDではユニークな組み合わせを採用した。

#### h) 画面アクセス履歴テーブル

画面アクセス履歴テーブル仕様においては、閲覧ログID、アクセス画面、アクセス時ポス

ト変数、アクセス時セッション変数、アクセス日時、アクセスユーザーの6つのシークエンスを作成し、そのコンテンツ内容を定義した。また、7つのシークエンスのうち、閲覧ログIDをプライマリーキーとして項目のひも付けを可能にした。患者IDとユーザーIDではユニークな組み合わせを採用した。

### ③ ネットワーク上の業務の検証

図5に示す業務手順に従い、電子連絡帳上で、病院、クリニック、介護事業所、行政関連機関、個人等の間でそれぞれやり取りされる医療・介護・健康情報を抽出し、関係者間でのワークフローを分析した。その後、HL7CDA-R2に対応するテーブル仕様を決め、ネットワーク上の情報交換機能を確認した。

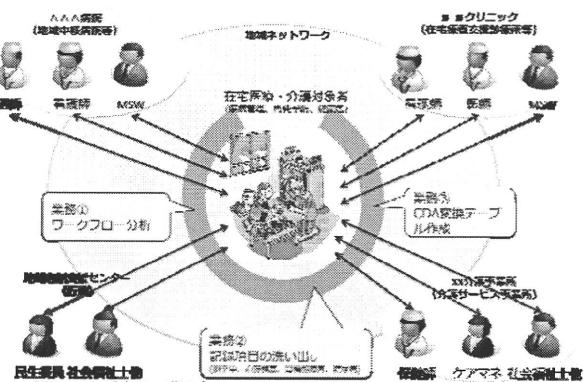


図5. 検証業務とその手順

実施した業務のうち、HL7CDA-R2変換に関する業務の詳細を図5に示す。ここでは、①記録項目の洗い出し、②CDA変換テーブルの作成、③InstanceXMLデータ化処理の3項目を実施し、データ形式の連続的変換を確認した。

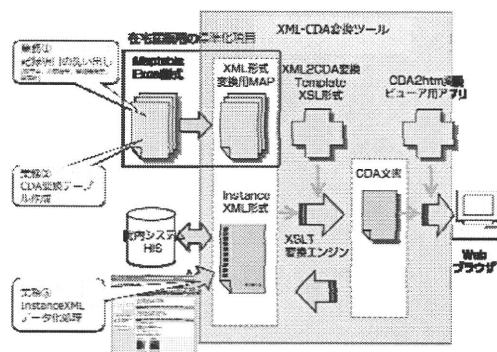


図6 HL7CDA変換に関する業務

#### 4. がん連携クリティカルパス

##### 1) 胃がん連携パスの運用検討

がん連携パスについて、平成22年診療報酬改定による「がん治療連携計画策定料（計画病院）」と「がん診療連携指導料（連携医療機関）」との整合性について検討を行ったところ、昨年作った胃がん連携パスでの運用に問題なく適合できた

。

##### 医療者用連携パス（胃がん連携パス）

図7. 港区版胃がん（ステージⅡ、Ⅲ）の連携パス

##### 2) 港区がん連携パス研究会の開催

①東京都の標準がん地域連携パスである5大がんの東京都医療連携手帳についての検討、  
②港区内のがん診療連携の実態等について上記の検討の結果、

港区版がん連携パスを診療報酬に対応させるためには、同がん連携パスに患者同意文書を加える等の変更が必要なことが分かった。これにより診療報酬対応のために患者同意文書を追加し、運用マニュアルにも診療報酬算定のステップを加えることとした。

##### ③ 胃がんの連携パスのIT化

港区がん連携パス研究会の参加施設においてASP方式によるインターネットを通じたがん連携パスの情報共有の検討を行った。

(株)東計電算の連携パスITソフト「Doctor network」を用い、実施可能性について、病院医師のヒヤリングを行った。図にその入力画面を示す。



図8 「Doctor network」の連携パス入力画面

面

とくに同入力画面の検査データの入力について医師の意見をヒヤリングした。結果は、

- ・病院内のインターネット環境が不十分なため、外来でインターネット経由で検査データ入力を行える端末が少ないこと、
- ・その都度、院内LANのデータを手入力で再入力しなければならないこと、入力ミスも懸念されること

などの運用上の課題が明らかになった。

次にがん連携パスのIT化の試みとして、港区医師会のホームページ上に東京都がん連携手帳（がん連携パス）の掲載を行い、ウェブ上で情報共有を図ることとした（図9）。以下の港区医師会のe-連携パス画面にアクセスすることによりがん地域連携パススを参照することができた。

##### みなとe連携パスに 「がん連携パス」を掲載



図9 港区医師会ホームページ

<http://medicalnet-minato.jp/cancer/>

##### 3) 診療所調査

作成した「港区版胃がん連携パス」について研究会に所属する6軒の診療所インタビュー調査を実施した。その結果、

- ・今年度より診療報酬によって評価されることになったため、がん連携パスの関心は高まっていることが分かった。
- ・しかし、まだ抗がん剤を取り扱うことへの不安を示す診療所医師が多く、まずがんの観察フォローのみの連携パスを希望する診療所医師が多かった。
- ・また患者紹介に当たっては、患者の住所地などの地理的な理由や、研究会所属以外の別の病院への紹介の可否、そして診療報酬算定に当たっての事務的な繁雑さを懸念する診療所医師も多かった。

## 5. 東京都医療機関の分析

1) 2008年10月に実施された医療施設調査によると都内には10655の医療機関(病院および一般診療所)があり、2011年2月現在、10548医療機関が1つ以上の施設基準の届出を行っていた。

### 2) 地域医療連携

地域連携診療計画管理料および退院時指導料(I, II)の届出の表示は区別されておらず一括して「地域連携」として表示されるのでその数を集計した。医療機関の種別は病院をさらに届出病床数200床以上を「大病院」それ未満を「病院」として区別し、届出病床が1~19床のものを有床診療所として統計を取った。

全医療機関の4.7%にあたる497医療機関が地域連携診療計画の届出を行っていた。

#### ①医療機関種別の分析

届出を行っていた497医療機関のうち103(20.7%)は200床以上の大病院、86(17.3%)はそれ未満の病院、283(56.9%)が無床診療所、25(5.0%)が有床診療所であった。なお退院時指導料(II)は200床未満病院及び診療所に限定されていた。

#### ②届出年別の分析

497届出医療機関の届出年の分布において、点数そのものは2006年改定より導入されているが出だしは低調で、2010年より急増したことがわかった。2011年に入ってからの届出も25.8%を占めるが、2月現在の集計であることを考慮すると今年の届出数は昨年を上回る可能性大と考えられた。

地域連携診療計画届出年内訳(N=497)

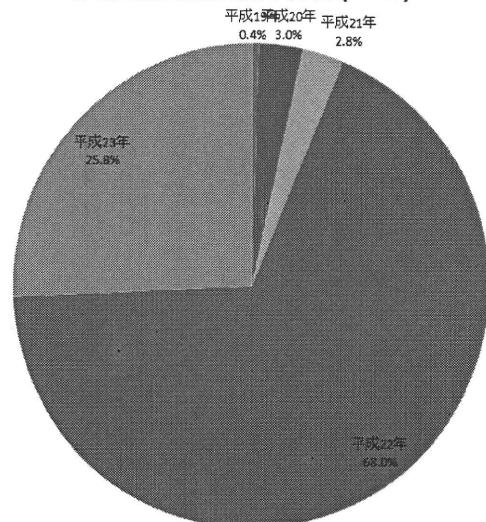


図10. 地域連携診療連携届出

#### ③市区町村別分布

都内医療機関の4.7%が地域連携診療計画の届出を行っているが、総医療機関に占める割合を市区町村別に示したもののが下のグラフである。三鷹市、武蔵野市が高く、これらの地区では5つに1つ以上の医療機関が参加している。都心区の届出率は低いが、隣接する板橋区と練馬区とでも大きな差がある等、その違いは地理的要件だけでは説明できない。医師会や中核病院との取組が大きく影響すると考えられる。

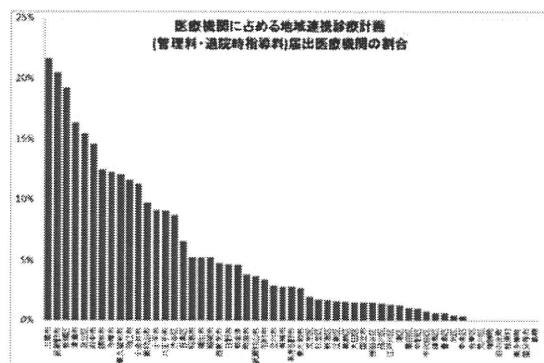


図11. 医療機関に占める地域連携診療計画

#### 2) がん治療連携

2010年改定で導入されたがん治療連携計画策定料およびがん治療連携指導料は、がん拠点病院を中心に策定された地域連携診療計画にそったがん治療に関わる医療機関の連携により、地域における切れ目のない医療の提供を促進するものである。

## ①がん拠点病院およびがん治療連携計画策定 病院の状況

2011年現在、都内には17のがん拠点病院、ならびに33のがん治療連携計画策定料届出病院があった。がん拠点病院は全て後者と重複している。がん治療連携計画策定料の施設基準は「がん診療連携拠点病院(健発0301001号)又はそれに準じる病院」とされているので当然ともいえる。大学病院であってもがん拠点病院はその一部である。

東京都市区内がん拠点病院およびがん治療連携計画認定施設出医承認

都道府 県	機関	機関種別	市区	所在地	一般 病床	精神 病床	がん専 門病院	心臓病 専門病院	がん治療 専門病院
東京都	財團法人 駒澤国際病院	中央区	晴海二丁目9番1号		1520	6			
東京都	東京女子医科大学病院	新宿区	新宿区西早稲田二丁目2番1号		1258	65			
東京都	駒澤大学医学部附属駒澤医院	文京区	本郷三丁目1番3号		1005	15			
東京都	東京都市大病院	文京区	本郷三丁目1番18号22号		876	6			
東京都	日本医科大学付属駒澤病院	文京区	千駄ヶ谷一丁目1番5号		970	32			
東京都	財團法人 駒澤研究所有明徳病院	江東区	有明三丁目3番31号		700	0			
東京都	NTT東日本東京病院	品川区	東五反田四丁目5番22号		615	50			
東京都	昭和大学病院	品川区	旗の台二丁目6番6号		253	0			
東京都	日本十字会東京医療センター	荒川区	尾久二丁目1番22号		733	0			
東京都	東邦大学医学部附属東邦病院	板橋区	荒川二丁目11番1号		1107	47			
東京都	日本大学医学部附属駒澤病院	板橋区	大谷口二丁目30番1号		42	42			
東京都	青梅市立青梅病院	青梅市	青梅市青梅一丁目1番地		628	0			
東京都	東洋医療技術大学 王子医療センター	八王子市	八王子市南条二丁目1番1号		613	0			
東京都	東洋医療技術大学 青梅野町十字病院	三鷹市	練馬区井草二丁目20番2号		581	0			
東京都	各務原市立各務原病院	各務原市	各務原市一丁目1番1号		1121	22			
東京都	東邦大学医学部附属病院	中央区	錦糸町二丁目5番1号		600	0			
東京都	東邦大学医学部附属駒澤病院	文京区	本郷七丁目3番1号		1150	45			
東京都	東邦慈恵看護専門医療学院	港区	西麻布二丁目1番16号		1026	20			
東京都	虎ノ門病院	港区	虎ノ門二丁目2番2号		182	0			
東京都	東邦都市医療中央病院	港区	三田二丁目4番17号		505	0			
東京都	国際医療福祉大学 東京病院	港区	三田二丁目4番6号		291	0			
東京都	北日本大学医学研究所附属病院	港区	白金五丁目5番1号		284	0			
東京都	東邦医療大学病院	新宿区	新宿区西落合八丁目1番1号		482	0			
東京都	東邦厚生病院	新宿区	新宿区久屋大通5番1号		1028	0			
東京都	東邦精神疾患病院	新宿区	新宿区歌舞伎町二丁目11番1号		985	26			
東京都	中央労災看護専門医療学院	大田区	大森西二丁目1番3号		423	22			
東京都	学習院・駒澤 天城日本大学医学部附属駒澤病院	品川区	幕張本郷二丁目3番10号		204	0			
東京都	東京都立こども医療保健センター	品川区	幕張本郷二丁目3番5地		737	35			
東京都	公立大病院	小平市	天王寺二丁目5番3地		612	0			
東京都	日本医科大学附属多摩川病院	多摩市	小山町二丁目7番地1		401	0			
東京都	東京医療法政大学 医療系病院	自衛倉庫	東が丘二丁目1番1号		730	50			
東京都	東京医療法政大学 医療系病院	西東京市	西東京市西町2番65号地		455	0			

## ②がん治療連携指導料

がん治療連携指導料は受入れ医療機関が送り出し病院（計画策定病院）に対して診療情報を文書により提出した場合に月一回に限り算定できるものである。対象になる患者は元の医療機関でがん治療連携計画策定料が算定された患者のみであり、それゆえ、両者はペアの関係になる。「情報提供の頻度は、基本的には治療計画に記載された頻度に基づくものとするが、患者の状態の変化等により、計画策定病院に対し治療方針等につき、相談・変更が必要となった際に情報提供を行った際にも算定できる（通達）」

本点数の届出医療機関は都全体で 1963、都内総医療機関数の 18.4%にあたる。

### ③市区町村別分布

市区町村をがん治療連携指導料届出医療機関の割合の高い順に並べると以下の通り。2010年より導入された新しい点数であるが、平均して脳卒中等の地域連携診療計画よりも既に高い普及率となっている。がん治療拠点病院が近隣にあるか否かが普及に大きく影響すると考えられるが、千代田区、港区といった高度医療機関の集中している地域においてもま

だあまり高くない。がん治療医療機関の診療圏は広く、患者も遠隔地から集まる傾向にあるため地元の診療所の間での普及率に即結びつかない背景が察せられる。

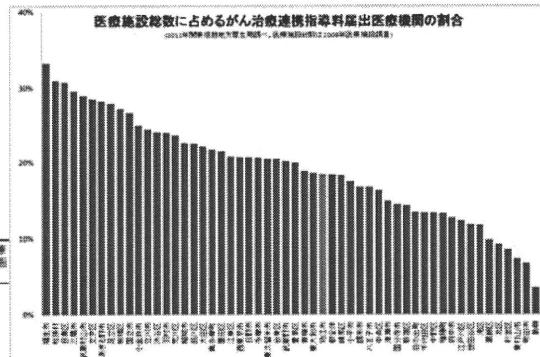


図12. 医療施設総数に占めるがん治療連携指導料届出医療機関割合

3) 脳卒中等とがんの医療連携普及率の相関  
脳卒中等を対象とする地域連携と、がん治療  
連携の届出医療機関割合に市町村ごとに相関  
はあるか？ すなわち脳卒中で地域連携の進  
んだ市町村はがん治療でも同様の傾向がある  
か、を明らかにするため両者の相関図をプロ  
ットした。

両者の間の相関はきわめて弱く、脳卒中等を対象とする連携とがん治療における連携は決して相関していないことが示された。対象となる疾患が異なるため、届出医療機関も必ずしも異なる、という事情がうかがえる。

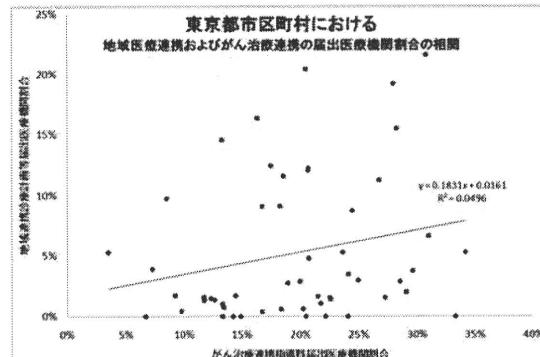


図13. 東京都市町村区における地域医療連携およびがん治療連携指導料届出医療機関割合の相姦

## 6. 地域連携の医療情報基盤構築のため先進的事例

米国における電子カルテの推進は、リーマンショック後の経済刺激策であると同時に医

療制度改革の大きな柱となっている。米国経済再生法 ; American Recovery and Reinvestment Act (ARRA)において、医療 IT へのインセンティブプログラムが策定されたが、電子カルテに関しては、Meaningful Use で規定された医療情報の電子化に対して、補助金をつけるものである。この Meaningful Use は、一義的には以下のような目標達成が望まれている。

- ・電子オーダー
- ・各患者の Problem Lists の電子化と適切な入力
- ・実施診療行為の電子的な記録
- ・患者属性（アレルギー・言語・民族・基礎的な健康情報等）の保存
- ・臨床指標の測定
- ・意志決定支援
- ・患者への医療情報の提供
- ・医療情報・検査データの構造化と交換

これらを通じて、無駄な検査の削減と医療連携のための情報基盤整備を行っている。

クラウド技術の医療への応用に関して、萌芽期であり、実践例は非常に少ない。クラウドコンピューティングの初期の実践例としては、画像情報システムの統合に見られる程度である。医療情報関連の最大のイベントの一つである、Health Information and Management System Society (HIMSS) の展示においては、クラウドコンピューティング型の医療情報システムの実践例が増加しつつある。これまで分担研究者は、クラウドコンピューティング型の電子カルテ、地域連携システムを構築しており、糖尿病疾患管理システム等へも応用が進んでいる。これは世界的にも非常に数少ない応用例である。

また、Web サービスに関しては、各国において進展しつつある。イギリスの NHS においては、早くから電子カルテのインターネット化に焦点を合わせてきた。これはイギリスにおけるガバナンス改革の中で、情報公開・透明性への意識が高まったことや患者側の情報への意識変化などが背景にあると考えられる。加えて、NHS 側としても、Pay for Performance による家庭医の質の評価や臨床研究などをを行うモチベーションから、積極的にインターネットを用いて電子カルテの導入を行ってきた。アメリカでも、インターネットをベースにした医療情報システムが増加傾向にある。その背景としては、イギリスと同様の傾向に加え

て、アメリカの医療制度では医師は病院に所属しておらず、独立しているため、病院での医療情報を外部から閲覧する必要性が高いことも理由として考えられる。多くの病院においてインターネットでの閲覧を前提としたシステムが導入されているが、例えばワシントン大学では、電子カルテへのインターネットを通じたアクセスに加えて、血糖値等の測定機器と電子カルテを、インターネットを通じて連携したり、インターネットを通じてコンサルティングを行うことが試みられている。アメリカでは上述した Meaningful Use というフレームワークの元で電子カルテの導入が進められているが、その目的は、単純に電子化により効率化するだけではなく、最終的に、下図のようなフレームでアメリカ全体の医療情報システムをつなげることで、医療の質向上・効率化や臨床研究の促進を目指している。

Nationwide Health Information Network (NHIN)

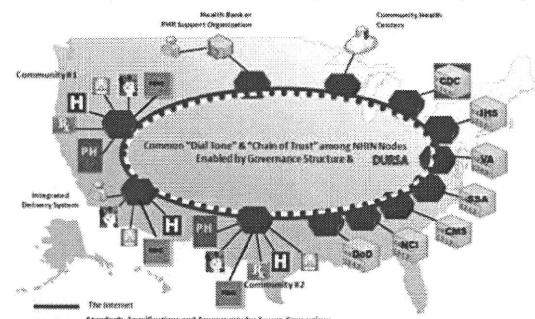


図 14. Nationwide Health Information Network

## 7. 海外の動向

### 1) 世界的動向

2010 年 3 月医療情報管理システム協会 HIMSS (Healthcare Information and Management Systems Society) ヨーロッパの下、スペインのバルセロナでシファレンスと展示 WoHIT (World of Health IT) 開催された。ここで、EU と米国の代表が、e-Health の相互運用性やメトリックス標準化により、大西洋を挟んだグローバル市場でのポテンシャルを上げる協定を発表した。さらに 12 月にワシントン DC で EC 副大統領と米国保健福祉省長官が医療情報の互換性進める協定に署名した。特に治験関連について標準化の検討が具体的に進められており、2010 年 10 月のオランダ・ロッテルダムの ISO/TC215 (医療情報) 会議で、標準化作業の詳細が報告された。一方、WHO は 2003 年から医療情報標準化団体に呼び掛け、標準のブリッジサポートを推進す

るグループを立ち上げ事務局を担当した。ISOを中心に欧州のCEN/TC251(医療情報)や医療データ交換標準化団体HL7などでの標準間の融合化を基に、SNOMED-CTの標準化団体IHTSDO(International Health Terminology Standards Development Organisation)や製薬関連データ交換標準化団体CDISC(Clinical Data Interchange Standards Consortium)などとの融合を拡大している。EHRの開発で主要な役割を果たした、国の推進組織、標準化団体、大学研究機関やグローバルベンダーが2008年オープン保健ツールOHT(Open Health Tool)を設立し、ツールの重複開発を防止しオープンで相互運用性の実証されたコンポーネント(SOA)の提供を目指し54団体が参画した。英国ではEHR基盤上に論理記録アーキテクチャを開拓するのに合わせOHTとの連携を進めることを目指した。また、米国のNHINやEUのepSOS(european patient Smart Open Services)ではロケーション管理コンポーネントの適用が進められている。EU、カナダやオーストラリアなどが、ブラジルが開発した保健サポートシステムの無償供与を中心に開発途上国支援を進めるグローバルサウスプロジェクトに協力している。WHOがISOでの先進諸国の医療情報の標準化のサブセットを段階的に適用できるよう標準化を進めている。HMNは開発途上国の整備を進めながら2014年までに開発途上国のメトリックスのオンライン化を進めているとのことである。

2015年をめどに先進国から開発途上国迄100カ国以上の国が夫々必要な保健データをオンラインでアクセスする環境を整えようとしており、EHRのグローバルな連携の時代に入ることとなった。1990年代のEHR研究開発時代、2000年代の標準化と国レベルEHR開発、2010年代の国を超えたEHRの連携の時代に入り、用語の統一化やオープンソースベースのコンポーネント化によるプラグ&プレイのシステム技術やツールなどのグローバルな支援体制も急速に整備が進んでいる。

## 2) EUの動向

- ・EUでは、2020年に向けた各国EHRの活用のための計画2020 Digital Agendaを発表した。
- ・各国間のEHRを連携する標準化や検証の準備INTEROPが終了
- ・2011年から2015年までにEU各国の救急データセット、患者診療記録要約、電子処方箋を連携するためのMandate403指令が出され、

epSOS(European Patient Smart Service)プロジェクトが開始

- ・上記開発のためCALLIOPE(Creating a European coordination network for eHealth interoperability implementation)を設定

- ・EUは2012年までに患者診療記録の最小データセットを標準化することを公表

- ・一方、2020デジタルアジェンダでは、EU介護なども含めた福祉を中心とし、より幅広い分野を含めた改革と遠隔の医療の全面再開への意向。

- ・論理記録アーキテクチャLRAを英国NHSが開発。国のレジストリに蓄積し共有。

- ・NHSの臨床関係者に利用をPRする一方、EUでは13606等を適用し幅広く臨床研究を行っている。—EHRのメッセージ基盤としてHL7協にLRA対応のサポート要請。

- ・臨床パスウェーは、英国では1992年から主に質管理の分野に適用、

- ・英国では1991年にNHSの病院で、Royal Free(教育病院)を中心に6年間で500人の臨床医と看護師が参加し、オンライン・ガイドラインMap of Medicine(SNOMED-CTベース)を作成

(Map of Medicineは400近い疾患に対するガイドを、プロセス・フローとガイドをつなげ、基本的なガイドに世界的なエビデンスとリンクさせ定期的な更新を行っている。ローカライゼーションを容易にし、臨床ワークフローとのリンクを容易にし(2レベルシステム)システムの柔軟性を保持)

## 3) 英国、デンマーク、スエーデンの動き

- ・英国は2007年末に2兆円を投資しEHR基盤の開発に成功したことを公表。—今まで確立したEHR基盤等を活用し患者安全、質の改善を進める中で大幅な効率向上を進める方針のもと積極的な活動を展開

- ・従来脊柱を意味するSpineという高速ネットワークで中央にDBを構築してきたが、今後の方向として、5地域に開発運用を移す分散化の方向が決められ大幅な予算の節減を目指すことが発表。

- ・統合情報システム計画ISIPを確立  
(ISIPはインフラストラクチャの欠落と組織間の統括をはっきりさせた。)

- ・NHSはEHRの開発と合わせ臨床パスウェーの適用に力を入れてきた。

(特にスコットランドでは精神病の臨床パスウェーで成果を上げ、ウェールズはMap of

Medicine で実績を上げ、これらを相互に活用しながら着実に成果を上げている)

- ・これらのノーハウとツールが質改善ツール IfI&I (Institute for Innovation & Improvement) として体系化。
- ・さらに今後社会ケアの分野への展開を図るため健康を維持するためのヘルシー・パスウェーとして地域に広げる研究開発の推進。
- ・欧州パスウェー協会 EPA の活動を積極的に支援し、EU はもちろんグローバルな展開に対しても積極的な援助。
- ・デンマークは EBM にもとづく集団小児喘息臨床パスウェーに Map of Medicine を適用しその事例を 2008 年 MIE で発表。
- ・これらの成果を EU とポーランドが資金を折半し標準化を目指した実証。
- ・デンマークは、最も EHR が進んでいると評価されているが、当初の計画を変え、メッセージ交換ベースに変更し、2012 年を目指した再構築を推進。
- ・また、2010 年 10 月にオランダ・ロッテルダムで開催された ISO/TC215 の会議で、EU の EHR3 点セット (13606, 12967 と 13940) と基幹コミュニケーション用に HL7 を適用し EHR を分散環境で EA (Enterprise Architecture) のもとに構築した経験を技術資料としてまとめて提案。
- ・これは現在途上国向けに WHO/HMN 提案 R14369e-Health と連携することでの幅広い EHR 開発のフレームワーク。
- ・スエーデンは 2008 年に 300 億円をかけ CEN/ISO の EHR3 点セット (13606, 12967 と 13940) による第三世代 EHR 開発を発表、
- ・開発成果を、2010 年 10 月の ISO/TC215 ロッテルダム会議で「サマリ交換による患者のオーバービュープロジェクト」で、国の質レジストリへの報告。2008 年の患者データ法にもとづく医療提供者間での臨床情報交換と共有のベースになると発表。
- ・この成果は当面 CEN への提案を予定、ISO 化も考えられ、定義と基本ビューは ISO9000 と同じになっている。
- ・国としての単一システム方式ではなく、地域を連合化するやり方でプロセスを調整し、ネットワーク上で医療関連者間の連携が出来る事を目指している。
- ・患者ビューを拡大しフラグメンテーションをホリステックに、臨床からの相互運用性を

実現、CDS はメタデータで閉じたかたちで EBM を実現。

- ・2008 年に英国 NHS が開発した Map of Medicine を国としてライセンスを受け適用。

#### 4) 米国、カナダの状況

- ・米国は 2009 年から新政権により、2 兆円近い国の資金と政府責任で EHR 開発を実施する方針のもと、2011 年から 2012 年をステージ 1、2013 年から 2014 年迄をステージ 2、2015 年からステージ 3 とし詳細な診療成果達成基準、適用標準および認定基準を法制化 (ARRA/HITEC 法)
  - ・登録申請し成果を報告し基準をクリアするとボーナスを取得できる制度を導入
  - ・2 年間で EMR の適用を 50% + と倍増に近いところまで展開。
  - ・急遽新政権のオープン政府方針で大手ベンダーを含む 60 社 200 人のボランティアで、安全で利用しやすく、効率よく安く使用できるインフラを無償で利用できるように、セキュア E-mail 上で XML スキーマによる保健データフォーマット化し、特定できる相手に直接送付できる方式 : Direct プロジェクトとして 10 カ月で実装適用を予定。
  - ・Direct は患者関連（保健情報、退院指示、臨床要約、リマインダー）、公衆衛生関連（免疫登録、症候群調査、検査報告）、他医療提供者向け関連（臨床情報、検査一テスト結果、紹介一ケア記録の要約）などかなりのアプリケーションに対応。
  - ・しかし、2013 年から始まるステージ 2 以降に関し、大きな課題を抱えている。
  - ・す第一点目は、まずステージ 1 で積み残した分の他に、ICD10 または SNOMED-CT, HIPAA5010 と保健情報交換 HIE への対応を行う必要。ステージ 1 への対応も 1 年以上の遅れも見込まれている。
  - ・第二点目は、昨年 12 月 17 日に大統領科学技術諮問委員会 PCAST から、医療改革のレビューを行い、FDA, CDC や CMS 対する根本的な改革を要求した。一方、ONC に対しタグ付き要素データにメタデータを附加したユニバーサル交換言語 UEL を 20-40 億円の予算で 1 年以内に開発し適用する勧告への対応。
  - ・必要な最小標準を検討することへまとまる方向になった。
  - ・オープン政府政策による大学や先端病院やグローバルベンダーが参加し、ユーザビリティ、プライバシー、共用 EHR、スマートホン

プラットホームやプラグ&プレイ医療機器の研究に夫々15M\$の資金で進めている様子が講演と展示として行われていた。

・PCAST勧告の内容は、技術的に米国の電子政府で適用され、民間ではGoogleやMS社などで適用

・米国で国を挙げて対応しようとしている医療IT技術は、EUはもちろん世界的に注目すべき内容である。

・第三番目は、前政権が2005年以降進めてきた疾病管理は保険者の視点からの制度であったが、医療提供者側からの視点で、医療提供者に慢性病へのプライマリケア医の対応として、病院、診療所や在宅など関連医療機関の診療の質を、対象を5,000人以上の患者との間で責任を持つ契約をCMSとの間で結ぶACO(Accountable Care Organization)で支払にインセンスを付ける内容の詳細を詰めて、2012年からパイロットを成功させる事が重要な課題

・こうしたインフラ強化において州に対しHIX(Health Insurance Exchange)システム構築支援し、CMSのシステム再構築(SOA化など)進めている。

・現在のシステムで特に注目されるのは、マサチューセッツ州の病院間で臨床を継続するための最小データセットCCRがASTMで標準化され、HL7がCDA用にドキュメント化したCCDが重要な位置付けにあり、これがEUの患者診療記録の最小データセットにも影響し、疾病管理や臨床パスウェーに貢献するとみられる事。

・カナダは2010年EHRをアプリケーションベースデータによるEHR開発は終了し、2015年に向け患者中心のEHR、2020年までに共用型EHRを目指すことを公表。

・アルバータ州など一部の州は先行しているが、EMRの普及は30%台と遅れており、全体で、EHRの普及は18%とおもわしくない結果に終わっている。

・プライマリケア用EMRのコンテンツ標準化を進め慢性病予防や管理、健康増進、投薬、患者安全やケアの質向上を目指す予定。

・HIMSS開発のEMR機能適用モデルを採用、・HIMSSはこれらの成果をEUに適用すべく、EU代表のスエーデンとの打ち合わせを行い、その成果を発表。

## 5) オーストラリア、ニュージーランドの状況

### ①オーストラリア

・オーストラリアは、EHR開発では電子政府プロジェクトの一環として最先端で始められたが、州レベルの展開で停滞し、SOA技術の精鋭を集めたNEHTAプロジェクトで国と州の合同体制をとりプロジェクトが推進。

・2007年にNEHTAプロジェクトが成功したが、2012年に向け遠隔医療やべき地航空医療などを含むシステム化が地域医療格差解消を目指す「国家e-Health戦略」にまとめられ推進。

### ②ニュージーランド

・ニュージーランドは2009年の政権交代で、今まで21地域で最適化を進めてきたシステムと2005年から国主導で進めてきたEHRとの間の整合性が取れていない事が問題となり、1年かけて、多くのバラバラで重複しているサービスをなくし、2014年までに新たな医療ITに基づく国としてEHRの開発を行う計画を発表。

## D. 考察

### 1. 脳卒中地域連携パスシステムにおけるIPsecVPN+IKEの運用

今回、神戸市医師会で開発した新しい地域連携パスシステムを使い、医療情報システムの安全管理のガイドラインでも推奨されているVPN:IPsec+IKEの実運用の実証実験を行った。利用したVPNはソフトタイプであり、グローバルIPが必要であった。このため、一般的なプロバイダーのDHCPによる、付与IPには対応できなかった。今後はハードウェアタイプのVPNを利用することも汎用性から重要である。

さらに一般回線接続、VPN接続、連携パスシステムへの認証も含め3回のID、パスワード入力が必要であり、非常に煩雑であった。これを一括して入力できる工夫も必要と考えられる。また、初心者でも抵抗なく使える認証方法の工夫も重要であると考えられる。

ログ上では、VPNの接続に時間的には、ストレスの掛からないものであり、実運用では、煩雑性、初診者にも扱えるインターフェースであれば、十分運用に耐えうると考えられる。また、連携パスシステムでは連携シートだけでなく、画像、検査結果等別の資料の添付も行われることが多く、様々な形態のファイルが添付できることを考えることも今後必要である。

ハードウェアタイプのVPN接続の実運用についても検討を進め、両者の利点を利用して、

状況や、環境により使い分けることも重要なと思われる。

## 2. 検査データ・検診データの連携

本研究では地域医療連携クリティカルパスシステムで重要である検査データに関して、病院や診療所以外のステークホルダーについて情報連携の検討と実験を行っている。

データ連携においてIT利活用として、検査会社との連携は現場の業務負担の軽減に繋がり、地域医療連携クリティカルパスをより魅力的にする。しかしこれらを推進する上で重要なのは、データ交換形式に共通形式を利用することである。これにより、異なる検査会社であっても同様に検査データをシステムに取り込むことが可能となり、データ連携がより推進される。また、検査会社に限らず、健診データに関しても同様の処理を行うことにより、地域医療連携クリティカルパスの有用性は向上する。

今回の学校健診データの検討では、実際にデータ連携の実証までは行っていないが、検討したPHRシステムのデータもHL7形式であるため、技術的には健診データとの情報連携は可能である。しかし運用面での問題も浮上している。それは学校健診は学校の管轄であるため、直接医療連携を行うことに対する検討が必要とされる点である。

## 3. 脳卒中・心筋梗塞を対象にした在宅医療用電子連絡帳の情報共有のあり方に関する研究

本事業では、現在、愛知県豊明市で運用している在宅医療支援ネットワーク「いきいき笑顔ネットワーク」を事例として取り上げ、このネットワーク上でやり取りされる医療・介護・健康情報の標準化の仕組みを作り上げた。その手順を以下にまとめた。

はじめに事業内容を定義するための仕様書を作成し、その後、使用サーバの選定、サーバ環境の整備並びに必要となるソフトウェアのセットアップを行った。

ワークフロー分析では、脳卒中及び心筋梗塞患者のデータを中心にして稼働している「いきいき笑顔ネットワーク」の中核システム、すなわち電子連絡帳のワークフローを詳細に分析した。その後、電子連絡帳に登録されている情報コンテンツから共通なものと特有のものをそれぞれ分類した。そして分類した情報コンテンツのそれぞれ

に対応する標準コードがあるか否かを検証しながら、CDA変換のためのマップテーブルを作成し、可能であればコードテーブルを作成した。これにより標準コードに対応する情報コンテンツの数をできるだけ多くした。その後、データ変換用のXMLフォーマットに落とし込み、連続的データ変換を可能にした。

これらの結果、在宅医療や介護、さらには健康維持に至るまでの情報の標準化が可能になった

## 4. がん連携クリティカルパス

### ①がん連携パスの検討

今年度、作成した胃がんステージI、II～IIIの連携パス、運用マニュアル、「わたしのカルテ」は、2010年診療報酬改定に対応して一部、変更が必要であることが分かった。

### ②港区がん連携パス研究会の開催

港区内の5つのがん拠点病院に呼びかけて研究会を開催した。研究会の開催にあたっては港区医師会、港区薬剤師会、港区保健所からの参加を得たことは港区における今後のがん連携パスの発展に貢献すると考えられた。また東京都のがん診療連携拠点病院協議会で作成した標準的ながん連携パスである東京都医療連携手帳との整合性についても考慮する必要があることも判明した。しかし同時に東京都全体の標準的ながん連携パスを補完する上で、港区という地域でのがん連携パスの検討も同時に必要であることも分かった。

### ③胃がん連携パスのIT化検討

(株)東計電算の連携パスITソフト「Doctor network」について現場の医師ヒアリングを行ったが、検査データの入力について現場医師からは、入力負荷や誤入力等の問題点が指摘された。このためIT化に当たっては、まず港区医師会のウェブサイト上でがん連携パスの掲載を行うこととした。

### ④診療所インタビュー

作成した「港区版胃がん連携パス」について6診療所の医師インタビューを行った。結果は診療報酬改定でがん連携パスに対する診療所の関心は高まっている。しかし、インタビュー結果からみると、診療所においてはまず術後観察パスから導入して、順次、経口抗がん剤療法に移行するのが現実的であることがわかった。

## 5. 東京都医療機関の分析